

当館所蔵の三岸好太郎〈花ト蝶〉1932年は、ももとは北海道大学に所蔵され、学園紛争の混乱の中から学生の手で救い出され、当館（当時は北海道立美術館）に預けられた作品。（のちに北大から正式に寄贈）この作品の救出者が2010年、41年ぶりにようやく見つかったのは、当館にとって最もうれしいことでした。また北海道新聞が朝刊1面の多くを割いて報道するところになったこと、救出者ご本人がそれをお許しくださったことにも感謝しております。

この作品は、描写の緻密さとともに、三岸最晩年の特色となる「蝶」が初めて登場し、三岸の画業を語る上での重要作品でもあります。眺めるほどに優しい心持ちになれるような、繊細な色遣いと優雅な趣が強運につながったのでしょうか。愛すべき1点として北海道立三岸好太郎美術館で永久く守り、多くの皆様にご覧いただきたいものです。

ここに救出当時の様子を、記事から多くを引用させていただき、お伝えさせていただきます。

（苦名）

三岸好太郎
〈花ト蝶〉
1932年



三岸好太郎の油彩 北大紛争から救出

恩人 41年ぶり判明*元学生の63歳医師
「放っておいたら失われる」

学生運動の嵐が吹き荒れた1969年の北大紛争。そのさ中、北大所蔵だった画家三岸好太郎（1903～34年）の油彩「花ト蝶」（32年、30号）をバリケード封鎖された教養部から許可なく持ち出し、道立美術館（当時）に避難させた学生がいた。これまで学生の身元は分からず経緯に謎が多かったが、この絵を現在収蔵する道立三岸好太郎美術館（札幌）が元学生を探し当てた。元学生が北海道新聞の取材に応じ、当時の状況を41年ぶりに明らかにした。（文化部 田中秀実）

元学生は後志管内在住の男性医師（63）。当時は医学部生だったが、教養部封鎖にかかわった。

道立美術館長だった故・工藤欣弥さんの著書によると、札幌市中央区北1西5にあった道立美術館（現・道立文書館別館）に絵が運び込まれたのは69年8月の夜。男女2人が「教養部にあった三岸の絵だが、破壊の恐れがあるので預かってほしい」などと警備員に言い、名乗ることなく立ち去ったという。

この年、教養部は6月末から学生が封鎖。多い時には数百人が立てこもっていた。医師が支援のため建物に入ったのは7月。放水で床は水びたしで、親しかった地質学の教授の岩石標本が「投石に使われ、なくなっていたのにあぜんとした」。

■ 乱闘を懸念

「花ト蝶」が掛けられていた大講義室は、大勢の学生が寝泊まりし、火炎瓶作りなどの作業場と化していた。「機動隊や（対立セクトの）学生が入ってきて乱闘になる恐れがあり、放っておいたら絵は失われると思った」そこで、絵をいったん別室に隠したが、「やはり心配で『預かってもらえるのは道立美術館だ』と同級生と話した」。道立美術館はその2年前、三岸家のコレクションを基に開館したばかりだった。

決行の日、他の学生に見とがめられることを心配し、夜を待った。車を持つ同級生に運転を頼み、女子学生にも同行を頼んだ。

教養部から無事運び出し、車で美術館に向かったが、その先のことは全く「思い出せない」。運転した同級生は十数年前に亡くなり、女子学生が誰だったかも分からないという。

ただ、医師の同級生で札幌在住の女性医師(62)は「当時、絵を運んだ話を彼からバリケードの中で直接聞いた。すごいと思った」と医師の話を裏付ける。

三岸美術館にとって、「花ト蝶」を救った元学生探しは開館以来の課題。同美術館の初代館長も務めた工藤さんは生前、名乗り出ることを新聞紙上などで何度も呼び掛けた。

医師は呼び掛けを知っていたが、名乗り出ることはなかった。その理由を「建物を占拠した自分にも、(紛争中に)多くの学術資料が失われた責任がある。堂々語れる美談ではない」と語り、複雑な胸の内をのぞかせる。

■勇気に感謝

しかし、女性医師の話をきっかけに恩人を探し当てた苫名直子学芸員は「会えて涙が出た。絵を守ってくれた勇気と行動力に、歴代職員を代表してお礼を言いたい」と話した。

「花ト蝶」は、チョウをモチーフにした最晩年の傑作群につながる重要作品。道立美術館は絵が持ち込まれた翌日、北大から保管の許可を得た後、75年に正式に寄贈を受けた。三岸美術館では来年1月16日まで展示している。

◇北大紛争◇

1969年、学生が大学民主化や大学臨時措置法反対などを掲げ、事務局、教養部、各学部の建物を実力で封鎖。全共闘などの約2千人がデモ行進中、機動隊と乱闘状態になるなど混乱を極めた。大学側は11月、学内に機動隊を導入して封鎖を解除したが、その後も封鎖と解除が繰り返された。

以上『北海道新聞』2010年12月26日朝刊より引用

〈花ト蝶〉は、記事の中では2011年1月16日までの展示とご紹介いただきましたが、2011年1月21日～3月27日の「音楽のある美術館2」展会期中も、引き続き展示しております。その後もなるべく常にご鑑賞いただけるよう、展示を続けてまいります。ぜひ会いにいらしてください。